

戦後前期における山梨県内小学校のカリキュラム研究に関する考察 ー山梨大学山梨師範学校附属小学校の研究紀要を中心としてー

On the Study of Curriculum Research as to Elementary schools of Yamanashi Prefecture in the First Half Period
after the World War II:

Based on Mainly the Information from the Journal of the Attached Elementary School of Yamanashi Normal School

中 込 繁 樹
NAKAGOMI Shigeki

要約：昭和20年代（1945年～1954年）は、教育の一大改革期であった。文部省の実験学校をはじめとする全国の学校では、新たな時代にふさわしい教育とそのカリキュラム開発に取り組んでいた。本稿では戦後教育の黎明期（昭和20年代前半）、山梨県内の各学校においてどのように新教育を受け入れ、カリキュラムを開発し、実践に活かしていったのかを山梨大学山梨師範学校附属小学校を中心に6つの小学校の研究紀要から考察した。その結果、山梨県内における教師の教育観と新教育構築に向けた歩みが明らかとなった。

キーワード：戦後前期、カリキュラム開発、山梨県内小学校、あおざり教育研究紀要

I はじめに

2020年（令和2年）4月1日から「小学校学習指導要領（2017年3月告示）」が施行された（中学校は2021年度、高等学校は2022年度から）。今回で8回目の改訂となる。折しも政府から新型コロナウイルス（COVID-19）の予防対策（感染拡大防止対策）として、全国すべての小・中・高等学校と特別支援学校について臨時休業の要請が出された中でのスタートであった。この臨時休業は多くの学校で、5月25日の緊急事態宣言解除後から6月上旬までの間実施された。学校現場は各方面への様々な対応を余儀なくされ、今なお懸命の努力が続けられている。新たな学習指導要領の理念が各学校において具現化されるには今しばらくの時間を要するが、関係諸氏の英知を結集してこの困難が克服されていくものと期待したい。

「学習指導要領」¹の船出は1947年（昭和22年）に遡る。3月20日に一般編（以下、1947年版）が刊行され、同年内に国語科他の各編が続いた（体育科編は1949年刊行）。4年後の1951年（昭和26年）には第1回目となる改訂版（以下、1951年版）が出された。詳細は後述するが、第2次世界大戦終結後（以下、戦後）初の学習指導要領1947年版と1951年版共に共通することは、「試案」という形で出されていることである。1947年版の序論には、「教師自身が自分で研究して行く手びきとして書かれたもの」であり、「これが全くの試みとして作られたことを念頭におかれ、今後完全なものをつくるために、続々と意見を寄せられて、その完成に協力されることを切に望むものである」ことが記されている。1951年版にも「学習指導要領は、どこまでも教師に対してよい示唆を与えようとするものであって、決してこれによって教育を画一的なものにしようとするものではない。教師

¹「学習指導要領」の命名は自身によるものと木田宏（元文部事務次官）が述懐している（木田宏教育資料集1 平成8年5月）

は、学習指導要領を手びきとしながら、(中略)創意を生かし、くふうを重ねることがたいせつである」と1947年版と同趣旨で貫かれていて、戦後の混沌とした世相にあって新たな教育を国民一人一人の手で創りあげていこうとする決意を感じる。それは、時を待たずカリキュラム運動として全国に広まっていき、その教育方法は経験主義教育と呼ばれるようになる。しかし、この経験主義教育は基礎学力の低下問題²をはじめとして各方面から厳しい批判を受けるようになり、1958年(昭和33年)の学習指導要領では、能力主義の立場へと傾斜していく。また、この第2回目の改訂では「学校教育法、同法施行規則、告示という法体系を整備して教育課程の基準としての性格を一層明確に」することとなりその基準性と法的拘束性がより強調され現在に至っている。

飛田(1988)は昭和20年代の時期について、次のように1951年(昭和26年)を境にしてそれ以前を「戦後前期」、以後を「戦後後期」と区分³している。

戦後の教育・国語教育の動向を検討するには、昭和26年度の「学習指導要領一般編」(試案)の出たのを境として(中略)それ以前を戦後後期、以後を戦後後期とすると、その特徴がはっきりしてわかりよい。戦後前期は、終戦直後の混乱から、あらゆる面で国家自体が必死に立ち直ろうとした過渡期である。教育・国語教育の面でも、ひたすら占領下の教育改革の線に沿って努力した他力本願の時期であった。戦後後期は、国家的独立を機会に、前期の他力本願の立場を反省し、この国の実情に即した教育。国語教育の在り方を、自主的に開拓し樹立した時期である。その意味において、昭和26年を両期の転機と考えることは必ずしも不自然ではあるまいと思う。

本稿では、この飛田の区分に従い「戦後前期」に視点をあてて、「終戦直後の混乱から、あらゆる面で国家自体が必死に立ち直ろうとした過渡期」の教育の様相を概観する。特に、山梨県内の小学校を取り上げ、その時代に生きた教師の声(考え)に直接触れることを通して、その時代の教育観と新たな教育の改革に挑んだ教師の努力への理解を深めることとする。

その方法として、1951年(昭和26年)以前の山梨県内の小学校の研究紀要(それに類するもの)から、各学校が新教育に対して(また筆者の専門とする国語科も)、どのように関わり取り組んだかを考察する。この時代の研究紀要を取り上げた先行研究としては、例えば大学の附属小学校(水原2015)や公立学校(中西2017)、教育行政機関(河野2018)、教科(国語科)の見地から(坂口2009)など、さまざまな立場や観点から論じられているものが多くある。それらは、当時文部省の実験学校として委嘱された所謂先進校が多い。山梨県内においても甲府北中学校(甲府北中プラン1949, 1950)は実験校として全国に名を馳せていて(馬場1949)、当時発足したばかりの新制中学校のカリキュラムに大きな影響を与えた。研究として十分価値のあるものだが、山梨県内の小学校を対象とした先行研究は管見の限りでは見当たらないため、本稿では小学校を主な研究対象とする。具体的には、山梨大学山梨師範学校附属小学校(1950)、富士川小学校(1949)、鏡中條小学校(1950)、鰐澤小学校(1950)、富里小学校(1951)、上野原小学校(1951)の6校の研究紀要⁴である。戦後前期

² 当時発行された「新教育と学力低下」(原書房 昭和24年12月20日発行)では、青木誠四郎、國分一太郎、倉沢栄吉などの研究者がそれぞれの立場から学力低下の問題について論じている。

³ 飛田(1988)は同書の別頁(p.246)でも1951年(昭和26年)を前後期の境とする考えに触れている。要約すると、昭和24, 25年ごろまでは、各地における研究会や雑誌論文には、単元学習一色といってよいほど数多くこの問題が取りあげられているが、26年後半以降はピタリと消えているというおもしろい現象がみられたそうである。その後は戦後の新教育に対する批判が、各方面から出されていくことになる。

⁴ 各学校のカリキュラム研究及び実践をまとめた冊子の名称はそれぞれであるが、本稿で論ずるときは「研究紀要」に統一する。

の資料はほとんどが残っておらず、筆者において探し得たのがこの6校ということになる。この6校も多くは山梨県の実験学校として指定された学校であり（そのため資料が残存したと言える）、当時県内各校のカリキュラム開発の参考となったことと推察し、その影響は少なくはなかったと考える。

Ⅱ 「学習指導要領 一般編」（試案）1947年（昭和22年）

はじめに、戦後教育の黎明期につくられ、「戦後前期」の教育に大きな影響を与え、現在につながる最初の「学習指導要領」（1947年版）について、その時代背景と共に概観したい。

1. 発行に至るまでの諸施策

戦後最初の学習指導要領が文部省から出版されたのは1947年3月であった。終戦の1945年から約1年半後のことである。その間の教育に関わる主な施策を次に挙げる。

〈1945年（昭和20年）〉

文部省はGHQ（連合国軍司令官最高司令部）の指令に基づき「新日本建設の教育方針」（9月15日）を公表した。その後、GHQは「日本教育制度二対スル管理政策二関スル件」（10月22日）、「教育関係者の資格についての指令」（10月30日）、「国家神道についての指令」（12月15日）、「修身科・国史科・地理科の中止についての指令」（12月31日）の4つの教育指令を出し、1945年中には必要な教育処置を行い戦時体制の一掃と民主主義に則った教育への布石を打っている。

国語教育に関わっては、「終戦二伴フ教科用図書取扱二関スル件」（9月）で文部事務次官より通達があり、教科書の中で国家主義的色彩の強い教材、軍事的な教材については削除・訂正が要求された。いわゆるすみぬり教科書である。

〈1946年（昭和21年）〉

3月に、第一次米国教育使節団の来朝があり、教育制度、教育行政、教育課程等の広範囲にわたる教育の民主化に向けた提案があった。それに基づき文部省は「新教育指針」（5月）を発表した。11月には「日本国憲法」が公布された。またこの年は「赤とんぼ」をはじめとする多くの児童誌が創刊された。

国語教育に関わっては、国語審議会設置（9月）、ローマ字教育協議会「ローマ字教育の指針」答申（10月）、「当用漢字表」（1850字）「現在かなづかい」について内閣訓令・告示（11月）があった。また、文部省は4月より使用するための仮刷りの国語教科書を出版した。これは、新しい教材を作成する余裕がなく、また翌年には新しい教科書の発行が予定されていたので暫定教科書として出版され、その内容も不十分なものが多かった（教科書とは名ばかりで、仮刷りの折りたたみでとじていないパンフレットのような形式）。

〈1947年（昭和22年）〉

3月20日に「学習指導要領 一般編」（試案）が発行、「教育基本法」「学校教育法」（3月31日）が公布された。続いて「六・三・三・四制」（4月）実施、「新制中学校」（4月）発足、「学校教育法施行規則」（5月）制定、「教科書検定制度」（9月）の発表があった。

国語教育に関わっては、12月20日に「学習指導要領 国語編」（試案）が発行された。また、最後となった国定教科書が4月の六三制実施と同時に使用された。これは総司令部のCIE（民間情報局教育局）の指示によって編集されたものである。従来にない、ひらがな先習、現代かなづかいの表記であり、内容も新しい教育方針のもとに編集された民主的性格をもつ国語教科書で、その後の検定教科書に影響を与えた意義あるものであった。

2. 主な内容と特色

(1) 一般編（試案）

戦後初の学習指導要領は、GHQ内のCIE（民間情報局教育局）の指導により、「第一次米国教育使節団報告書」（1946年6月）やアメリカの各州で用いられている「コース・オブ・スタディ（course of study）」などを参考に編纂刊行された。その内容は、これまでの画一的な教育の反省のもと、児童や青年の生活と経験及び個性が重視された「生活経験主義」（児童中心主義）を反映したものであった。学習指導理論としては、経験主義的な「単元学習」が強調された。また、この時期の教育思潮として「コア・カリキュラム（core curriculum）」が挙げられる。

主な特色は「ア 従来の修身（公民）、日本歴史及び地理を廃止し、新たに社会科を設けたこと
イ 新たに家庭科（男女共修化）を設けたこと
ウ 新たに自由研究を設けたこと
エ 各教科の授業時数を改めたこと」である。

(2) 学習指導要領国語科編（試案）

学習指導要領国語科編（試案）（以下、国語科編）は1947年12月に発行されている。現在に至る戦後の国語科教育の淵源をなすものである。主な内容として、まず、国語科学習指導の範囲を5つの部門〈(一) 話すこと（聞くことをふくむ）、(二) つづること（作文）、(三) 読むこと（文学をふくむ）、(四) 書くこと（習字をふくむ）、(五) 文法〉で構成している。そして4項目の目標に続いて、小・中学校を通じて、育成すべき能力の発達を35項目示している。ここには言語教育としての国語教育の立場がはっきり打ち出され、言語機能を重んずる経験主義国語教育の方向づけ（飛田1988-b）がなされている。

注目すべきは、参考一に「単元を中心とする言語活動の組織」の項目が設定されていることである。そこには「単元による方法は、児童・生徒が解決しなければならないような問題をだし、児童・生徒が問題を解くときのすべての経験、到達した結論、達成した結果をまとめていくことであると定義できるであろう。国語教科書の一課一課も、じつは、そうした作業単元を考慮において編集されている。ここでは、そうした与えられたものでなく、児童・生徒みずからが問題を選びだして、自発的に活動するばあいを考えてみよう。とくに中学校の生徒に実施しうるものについて考えてみよう。」と単元学習の定義が述べられ、「われわれの意見は、他人の意見によって、どんな影響をこうむるか。」という中学校3年生の例が示されている。この点について、飛田（1988-b）は当時の様子も含め次のように述べている。

ここで見逃せないことは、「国語教科書の一課一課も……」として、教科書教材つまり単元のまとまりの中心を教材の理論体系においた教材単元を意義づけながらも、前述のような問題解決の経験単元を強調している点である。単元を学習内容から整序して、

○教材単元→教材自体の論理性→与えられたもの

○経験単元→学習者のうちに統一の根拠を→自らの問題解決

に振り分け、後者の方法化を求めているわけである。（pp. 30-31）

飛田は社会科を中心とした経験重視の単元学習との違いを指摘している。そして、国語科編の編纂に携わった石森延男の苦心にもふれ、その当時の実情を説明している。それを、端的にまとめると次の3つに集約できる。

- ・当時の国語教室の現場には問題解決の経験的単元学習は未開拓であり、その先行文献資料は皆無で当事者は苦悩の連続であったこと
- ・国語科は他の教科やアメリカの教育とは性格や学習の仕方が違うために、いきなり経験学習の

「単元」にきりかえるわけにはいかず、国語科編では本文に入れずに、付録に「単元例」として掲げたこと

- ・「付録」という土地で教師たちとその方法や理論をねって、やれるという見通しをつけること

飛田（1988-b）は単元の特質を次の4つに分類している。そして、国語科編の発行以降、実際の学校現場では、この4つの単元学習法を基底にした多様かつ複雑化された授業が国語教室に展開し始めたと当時の状況を分析している。

- （1）教材単元（伝統的）の立場から、国語教科書を教師本位に順次教え込む旧来の教授方式
- （2）教材単元（機能的）の立場から、教科書教材を中心としながら学習の主体性や自発的な活動を重視する新しい指導方式
- （3）経験単元（言語的）の立場から、言語生活に係る学習者の課題を中心にした問題解決に取り組みながら、その過程を通して言語能力を育成する学習の方式
- （4）経験単元（生活的）の立場から、学習者が当面し、自ら選んだ生活的問題解決を中核（コア）としながら、その経験の発展を目指す学習活動の方式

Ⅲ 山梨大学山梨師範学校附属小学校のカリキュラム研究

1. 「おおざり教育研究紀要第3集～9集」1950年（昭和25年）7月1日発行

（1）研究紀要発行に至るまでの研究のあゆみ

山梨大学山梨師範学校附属小学校（以下、山梨大学附属小学校）から1950年（昭和25年）に発行された「おおざり教育研究紀要」はB5版の大きさで第3集から第9集までの全7冊から成る。第3集のタイトルは「本校の教育課程附要素表」とあり、第4集から第9集までは「○学年の教育計画」のタイトルで、学年ごとの分冊となっている。各刊とも80ページ程である。同年7月1日、2日に開催された第4回教育研究会に向けて発行されたものと考えられる。国立大学附属学校の使命として、教育実習、実証的研究の他、「本県の実験学校として県の初等教育に貢献するような参考資料を提供し且つ現職教育の一翼も荷は（ママ）なければならない」とあり、研究の成果が山梨県内の小学校に広く寄与することを目的としている。

これに至る経過を同小より刊行された「あゆみ」（1960年）より引用する。

（1947（昭和22年））

3月4日—第1回教育研究会（公開） 戦災校のため教室が狭いので各学校低・中・高より一名ずつに制限したのであるが、庭に机を出して参観するほどの盛況さであった

6月26日・27日—第2回教育研究会（公開） 特に社会科、ローマ字、自由研究の新教科の研究発表12月—おおざり教育第1集発行 各教科の年次計画（社会、理科、音楽、図画工作、家庭、体育のカリキュラム）及びその解説をかさね、研究報告として発表した。県下に奉職している初等教育の実践家は、各校のカリキュラムを作成しようとしていた時期であったので、この発表は大きな示唆をあたえたことと思われる

（1948年（昭和23年））

6月—おおざり教育第2集発行（国語、算数、理科のカリキュラム）

6月9日・10日—3回教育研究会（公開）

9月～翌年3月まで—文献的研究、実態調査の計画と実施

この年は、米国教育担当者が時々本校に訪れ助言をあたえた年である

〈1949年（昭和24年）〉

4月～7月一カリキュラム構成の実態調査（教官が分担して全国各地の著名な小学校を参観して、本校カリキュラムの参考とした）

4月～翌年3月まで一新教育計画の立案

〈1950年（昭和25年）〉

1月一各教科の研究内容に検討を加える

2月一カリキュラムの形態を教科カリキュラムとし、学校教育目標の検討をした

3月一シーケンス・社会調査・日常生活課程・要素表の検討を加える

4月一自由研究を選択学習として、学校カリキュラムに位置づける

7月1日・2日一第4回教育研究会（公開）

当日は前回までの公開研究より一段と盛会にして、カリキュラム構成に迷っていた県下の初等教育者に一つの方向を示すことができた

概略ではあるがこのように通史的にみると、戦災に遭い、終戦直後の混沌とした時代の中であって、県下においていち早く校内の研究組織を立ち上げて、新たな時代の教育の在り方を懸命に模索し続けようとする山梨大学附属小学校の教師集団の姿が思い浮かぶ。このような状況の中でまとめた「おおぎり教育研究紀要第3集～9集」は終戦後の4年間の実践と研究の成果と言え、山梨大学附属小学校における戦後前期のひとまずの到達点とみることができるであろう（またそれは新たな局面に向かう出発点ともなっている）。そしてそれは同時に新教育の在り方に悩む県下の小学校の実践と研究の参考として大きく寄与したものと考えられる。

（2）おおぎり教育研究紀要第3集について

第3集「本校の教育課程附要素表」の目次は表1の通りである。10の章と各節で構成されている。

表1 おおぎり教育研究紀要第3集「本校の教育課程附要素表」の目次

一、まえがき	五、本校教育課程の骨組み
二、附属学校の立場	1 教育課程の建坪
三、我々はどんな立場に立つか	2 建坪にはまる設計
四、本校教育課程構成の手続	3 日常生活課程
1 教育目標	4 教科（生活）学習課程
2 要素表	5 基礎学習課程
3 教育課程の形式	6 選択学習課程
4 スコープ設定の態度	六、教育課程を活かすもの
5 シークエンス設定の態度	1 視覚教育 2 聴覚教育 3 図書館経営
6 単元設定に対する態度	4 校友会 5 全校体育
7 本校教育目標一覧表と重点	七、実践記録簿
8 教育課程構成のための調査	八、本年度研究計画
	九、学校運営組織
	十、要素表（国語、社会、算数、理科、音楽、造形、家庭、健康）

当時、山梨大学附属小学校はどのような研究を目指したのか、まずはその理論的な背景を上記一章から三章の中にみていきたい（一章「まえがき」に研究を推進した主事、平山日出男の名前がある）。筆者の理解するところ、大きく分けて5つの主張が見て取れる。

①コア・カリキュラムの捉え方

戦後の新たな教育方法として耳目を集めていたコア・カリキュラムについては下記に引用した平山の言葉に表れている。

「いろいろの条件を考慮した結果、我々は所謂コア・カリキュラムのような形式を採用しても、本校に於いては決して効果が挙がらないという結論に達した。広く且深い一般教養を身につけた経験豊かな教師が揃って居り、施設も完備し、また完全なソースユニットが用意されている場合にはコア・カリキュラムもよいかも知れない。本校では何れの条件も欠けている。従って「身の程を知って」本校の実態に即応するような教育計画を打樹てた。併しそれは旧態依然たる教科カリキュラムではないことは勿論であるが、文部省の現行学習指導要領に忠実に準拠したものでもない。後者に対しては相当高く評価し乍らも批判的態度で臨み、思切ってそれから逸脱してみたいところもある。我々はその方が教育的効果が挙がるだろうと思って試みに実施しつつあるが、その効果を明にするためには、なお時日を籍さなければならない。併し本校の使命に鑑みてそのような冒険も許されることがあろう。」(p. 1)

このことは、別頁(p. 7)でも触れられ、その「優越性を理論的には認め得る」としながらも学校の諸条件が整っていないこと、教師がそれを十分理解するには至っていないことなどを挙げ、「教育の効果を減殺し、単なるデスクプランとなり終る」ことを危惧する見解を述べている。また、学習指導要領に対しては、研究を一つの使命とする学校である立場から「必ずしも国家の示す基準に従うことなく、これを批判的に眺め、思切った斬新且独創的な研究をしてもよいと思う」と述べ、戦後の新教育の在り方に対して山梨大学附属小学校としての一つの解を示していこうとする姿勢を感じる。

②生活経験主義に対する捉え方

戦後取り入れられた生活経験主義の教育に対してどのように捉えていたのだろうか。研究紀要では「指導が出来得る限り生徒の興味と必要とに動機づけられた現実の生活経験の中に於て、生徒の創意と工夫とが伸長されるように仕組まなければならない」とし、「価値ある生活経験へ児童を導き入れること」、児童の「生活経験を豊かにし、深め又高めて」いく必要性が説かれている。一方で、「生活経験の選択並にその展開に際しては、児童の自由と創意とを極力尊重しつつも、教師の指導が絶対に必要であること」を確認し、「児童教育に於て指導者としての教師の地位を再確認すべき現状にある」としている。このことは、次に引用する文面からも強調されていることが分かる。

新しい教育学の主張する「児童から」の原理は十分尊重しつつ、我々は児童を買いかぶって「教育的感傷主義」や指導性を忘れた「軟教育」に陥ることを警戒しなければならない。(中略) 児童の皮相な変転する「興味」に引きづられて、一貫性を欠いた「機会教育」に陥ることを極力警戒しなければならない。

これらの言葉から、生活経験主義の教育に対して、山梨大学附属小学校では客観的にそして一定の距離を置いて捉えていこうとする態度がみられる。このことは、「経験あって学びなし」、「這い回る活動」などと揶揄された経験主義の教育への反省と批判が当時の山梨大学附属小学校内にもあったことが背景にあると考えられる。

③個人差への対応

研究紀要には「民主々義的教育は個人差に着眼」し、「我々の教育は個別指導に徹しなければなら

ない」と書かれてあり、児童の個人差に対応した指導の必要性が述べられている（これは、戦後初の学習指導要領（1947年版）を受けてのことと考えられる）。また、そのために一学級の児童数を30人以下に減ずるような施策の必要性を訴える箇所がある。当時において具体的数字をもってその課題を示していたことと、今もって完全に実現されていないことに感慨深いものがある。

④科学的な教育技術（指導技術）と教育環境整備の重要性

「巧な指導は教育の目的を生かしも殺しもする故指導技術の徹底的な研究」、「教育技術が十分に発揮される基盤となるサイドブックや・ワークブックや、教具や施設の研究」と述べ、教師の力量形成及び教育に関わる環境整備の必要性を説いている。

⑤新しい社会に求められる資質・能力について

民主主義は「人間の協調に基く調和的秩序の美を最も尊重する」ために「礼儀作法」（ただし過度の形式主義に陥ることは警戒しながら）を大切に「公衆道徳社会道徳の涵養」に努めること、「常に変化に適応出来る自発的な創意と工夫に富む人間を又、熾烈な改革的意識に燃える人間を育成すること」の必要性を述べている。またそのため、「知識偏重の教育」⁵よりも「理解態度の啓培」⁶に重点を置くことに言及し、これからの「民主主義の社会」に生きる児童に求められる資質と能力について説明している。

（3）附属小学校のカリキュラム研究

附属小学校の実践の骨子となる教育課程についてみていきたい⁷。

① 先行研究

坂口（2009）には国語教育の視点から、「おおざり教育研究紀要」に触れられている箇所がある（第3，5，7，9集）。それは、「（資料9-1）師範学校附属学校カリキュラムの概要」という一覧表の中に一項目として掲載されている。カリキュラム類型が「Ⅲコア+教科目（国語）」であること、単元の分類が「A経験単元（生活経験的な問題解決学習）、B国語単元（言語活動や主題を中心とした学習）、C教材単元（読本教材を中心とした学習）」であること、そして評価及び能力表（社会、国語）が付されていること（という情報のみ）、である。坂口の研究は他の附属学校に主眼が置かれているため、山梨大学附属小学校はこれだけである。したがって、その詳細は筆者において以下に明らかにしていく。

② 山梨大学附属小学校のカリキュラムの具体

山梨大学附属小学校の教育課程の設計は複数の形式を採用したものとなっている。それは上掲の坂口（2009）において触れられている通りである。その理由として、研究紀要には、教育課程によって児童に提供される経験が質的に高い価値を保証するものでなければならないこと、地方や学校のさまざまな条件を考慮していかなければならないことの2点が挙げられている⁸。

説明によると、低学年は、「生活経験に基盤をおく単元学習に各教科が論理性と心理性の交織のもとに立てた単元の系列を自然に融合させ、児童の経験を高めるべく考慮されて」いる。高学年は、「教科間の重複をさけて、相関を計画したり、教科の独自性をも生かすことにしてある。」と、教科

⁵ 一方で、道具としての知識技能についての必要性を次のように述べている－「民主社会の参加者として必要な最小の知識や技能のあることを否定したり軽視したりするものではなく、寧ろそれ等の道具を十分且完全に備えなければ、児童の創意も工夫も十分に発揮されないことをも確認する」

⁶ そのための指導の在り方について次のように述べている－「指導が出来得る限り生徒の創意と工夫とが伸張されるように仕組まなければならない」

⁷ 当時の教育課程の構成は「目標設定，スコープ，シークエンスの決定，単元設定，単元展開」が一般的な公式とされていた記述がある。p. 8

⁸ これに加え、次のように学習指導要領（1947年版）の立場にも触れている－「学習指導要領を考察しても、融合教育課程または広領域教育課程と見られるもの、教科教育課程の特徴を残しているものも見られ、社会科を中枢とするコア・カリキュラムとも見做される程である」

を中心とした計画になっている。しかし、「古い教科型教育課程に属するものではない」ことと、「たとえ高学年であっても或る時は広領域的な、あるときは教科的な、又ある時は相関的な課程の型をとる豊富な伸縮性と有効な発展性をもつ力動的なものである」ことを補足している。中学年は、「両者の中間的なもの」とされている。

スコープ⁹（学習範囲）設定については、「教科書法、教材法、作業単元法、主題法、興味中心法、社会機能法、個人課題分析法」等を参考しながら、「児童生活の全領域をおおう包括的なもの」を取り上げている。

シークエンス（題材配列）の設定については、児童の発達段階に応じて、児童の中心的な興味を根拠としながらも「論理的な発展と進行」が図れるように配列がしてある。

教育目標は表2-1の通りであるが、現在の表し方とは随分違っている。児童の具体的な姿として48項目に及ぶ細かな目標が設定されている。その決定は、「社会理想（憲法に示された民主的理想）」をはじめとして、健康調査、音楽の実態調査、地理的領域調査、時間的領域調査、数量面の調査、理想人物の調査、また保護者による調査など、各種調査結果及び教師の児童観察等に基づいて行われている。また、目標設定と単元設定との関係が「不明瞭というよりは無関係に取扱われている」傾向に課題意識をもち、それを「排除する」ことに努め、目標が単元設定、更にはその展開に強力に結びつくよう意図されている。

表2-1 教育目標の一部

教 育 目 標	父兄 満足度	本 校 実 績
1 身体を積極的にきたえる	9	○
2 健康を維持増進するに必要な知識能力を養う	7	○
3 危険から身を守る	29	
4 スポーツの意義を理解し、これを楽しむ生活態度能力を養う	20	
5 規則的に運動する習慣をつける	23	
6 常に作業に適した正しい姿勢を保つ習慣を養う		
7 保健施設の現状を理解し、これを利用する能力		
8 醫學の進歩について理解する		
9 發育期に適した食物を理解して好嫌なく食べる	10	
10 民主的に話しあい決めた規則を理解して守る	6	
11 人を尊敬する	4	○
12 仕事を共同してする		
13 集團生活における責任を重んずる	2	○
14 人々の間の禮儀をわきまえて実行する	12	○
15 愛情をもって人に接する	4	○
16 外國及び外國人を理解して接する	28	
17 困っている人を親切に世話する	23	
18 物事を正しく批判する	3	○
19 自尊心を育てる	16	
20 明るく伸び伸びした態度	5	○
21 クラブを育てる		
22 グループから代表者を正しく選ぶ能力	27	

表2-2 年次計画表

月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日		時		分		秒		年		月		日	
---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--	---	--

教科学習課程は、高学年（3年生以上）で運用され、各教科間の有機的関連をはかりつつも教科の独自性を活かせるように配慮されたものとなっている。またその実施に当たっては、学習指導要領の「教科課程表時間基準」をもとにしながら、山梨大学附属小学校独自の時間配分を設定している。1, 2年生は系統学習課程という名称で各教科が配列されているが、それは単元学習に融合する形で展開されている。

基礎学習課程では能力別、個別指導の徹底を期して、算数、国語、読譜練習などのドリル学習が行われる。毎日30分間をそれに当て、教科学習とは区別して特別のコースを設定している。

選択学習課程は、学習指導要領（1947年版）にある「自由研究」と同じ考えの基で設定されている。「自由研究」に関して課題点¹⁰も述べられているが、山梨大学附属小学校の児童にとってはそれを「欲している」ことや「着々効果をあげつつある」ことなどの実態を理由に教育課程の中に位置づけたことが説明されている。文芸部、科学部、美術部、音楽部、体育部の5部門の下にさらに例えば、科学部であれば、生物、空、土、機械、算数がクラブという形で編成されている。それらを1単位2週間の研究期間を設けて毎日60分間通年で実施されていたようである。

付録の「要素表（最小必要量）」は各教科¹¹（国語、社会、算数、理科、音楽、図工、家庭、体育）別に、その目標と内容が学年ごと一覧出来るように表されている。これについては「要素表の型はいろいろ考えられるが、現実の問題として、我々の力では学習指導要領（筆者注：1947年版）を具体目標に照らして分析したものしか完成できなかった」と述べられている。しかし、目標に対しての系統性もみられ1年から6年までの各学年で何を目標せばよいのかその具体が示されている点において、大いに他校の参考となるとのものであったと推察される。

（４）「学年の教育計画」

第4集～第9集は、「各学年の教育計画」が分冊として刊行されている。これをみると、各学年の様子が詳細に分かる。低学年、高学年で教育課程の構成が異なる部分があるため、本稿では、1学年と6学年を取り上げて概観していく。

最初の「はしがき」は全学年共通で、主事の平山の執筆によるものである。この学年別カリキュラムは「指導計画」の性格をもち、その特徴として、「基礎的な諸能力の鍛錬に十分留意した」こと、「選択学習の時間を多分に取ってみた」ことが挙げられている。前者については、生活中心のカリキュラムにおいて基礎的な諸能力は生活実践及び問題解決の道具と見做され、その重要性が「見失はれ勝であった」ことへの反省からである。執筆者の平山は文部省の学習指導要領を中心としながらも、そこに包蔵される矛盾をできるだけ取り除いて山梨大学附属小学校の実態に合わせた形に学年の指導計画を整えたことを記している。では、その矛盾とされる課題とは何か。その最大なものとして、「各教科毎に単元学習を実施しようとするために、生徒に与えられる教育的経験に重複が生じ、従って無駄な手数と時間をかけること」を挙げている。これは実践する場面においても課題となったようで、それを次のように3つほど挙げている。それは第一に「『最小必要量』（要素表）の問題の未解決（一つ一つの要素にかける時間数など）」、第二に「『最小必要量』を中核課程の中にどのようにして盛り込むべきか（試行錯誤的に設定した単元に得られると仮定した成果を要素表に照らして脱落や重複がないか検討するよりほか仕方がないが、それは極めて煩雑な作業であること）」、第三に「教師（コアティーチャーとしてふさわしい教師を養成してこなかった）と物質的な環境

¹⁰「自由研究」は次の学習指導要領（1951年版）では姿を消す。山梨大学附属小学校の研究紀要の中にも「最近自由研究の時間が廃止されるとか、他の特別活動に包含されてしまうとか仄聞する」と触れられているように、改正前の早い段階でその方向性は示されていたようである。その主な原因として「児童に自主的学習態度が欠けていたこと」を挙げている。また「本校に於いても自由研究実施については幾度の障壁につきあたり悩み失敗した経験がある」とあり、学校現場での実際の運用に当たっては、相当の試行錯誤があったことは想像に難くない。

¹¹ 要素表は教科ごとに、表題がつけられているが、図工は造形活動要素表、体育は健康要素表となっている。

活動の呼び起こし方、すなわち、指導法が適切であったかどうかを反省することができるし、また、一人一人の児童や青年の学習結果を知って、これからの指導の出発点をはっきりさせたり、その指導計画を考えたりするいとぐちを見つけ出すこともでき、学習の効果をあげて行く上に、たいせつなものを得ることができるのである。

また、評価の方法として、総合的な方法と分析的な方法に分け、具体的に解説されている。総合的な方法には、①日常の観察②学習帳など記録・成果物③報告や論文などの記述④知識や考え方を問う問題、といった例示がある。

評価を教師自らの指導の反省として、次の指導に活かしていこうとする考え方は、当時としては画期的なものであったと推察する。そして、このような今では当たり前になった評価の意義や方法は最初の学習指導要領にその起点があり、それは現在においても大筋では変わらない普遍的なものであったことが理解できる。

系統学習については、国語科を取り上げる。生活単元学習と関連する内容が多い（65時間中51時間が生活単元学習に総合されている）が、年間の指導計画が一覧表となって掲載されているため、国語科としての学習がどのようになされてきたのかが把握できる。指導計画は月、題材、時間、指導要項（重点・表現）、評価、関連資料・作文の7項目で構成されている。

解説には、根幹を「教科書での経験学習」に置き、生活学習の一環としてあるいは関連をとりながら学習を進めたり、国語科自体としての単元学習、教科書学習を進めたりする研究を試みてきたことが記されている。これは、昨年度まで国語科の単元学習を実施してきて、「それ一本で通そうとするとところに難関がある」ことの反省による。また、これ以外に、当時の学習指導方法として、コア・カリキュラムによる国語学習指導、言語経験による国語学習指導、教科書による国語学習指導がその長短所と共に挙げられている。特に教科書による指導方法は、「最も古い方法であり進歩的学習指導法と対称的な教科書の教材を追って学習を進める方法で、現在では古いとして捨てられ気味になっている」と述べられていて、当時の状況を感じとることができる記述がある。それではなぜ教科書を主とする学習方法を選んだのかということ、一つには、「読むこと、書くことに偏せず、広い学習指導の中に話す、聞く、読む、書くの活動を取り入れて行うならば相当の効果が期待できる」こと、もう一つには、民間教科書が発行されたばかりの時期¹³がその背景としてある。民間教科書については、それを活用して自校のカリキュラムに添う教科書が選べることと、教科を中心に表現活動まで発展することを目途してのことであったようである。実際、複数の教科書や児童作文、絵本、児童書などさまざまな資料を使用して単元学習が展開されている。

指導要項はさらに「重点」と「表現」に分かれている。「重点」には、各題材の指導目標、学習指導要領などが、「表現」には、表現手法、文字、言葉などが列挙されている。現在のものと比べると、「重点」が指導上の留意点（教師のなすべきこと）であり、「表現」が学習活動（児童のなすべきこと）に相当するが、両者が混在している面もある。各題材に対して、指導することが細かくナンバリングされており、時系列を追って学習をたどることが可能となっている。指導目標については、国語学習指導の目標ばかりでなく、文芸的思想的な面、広い社会的な面にも言及したとある。導入については「過去の経験を話し合ったり、経験させて話し合ったり、その他環境設定、視聴覚による幻燈、映画、レコードなどにより興味を喚起させる場合、教科書のさし絵の話し合いから読みへ導入する」などのさまざまな工夫が示されている。また、展開においても「読解作業と話し合い学

¹³ 初の検定教科書は、1947年9月の文部省による教科書検定制度発表を経て1949年4月より検定教科書の使用が開始された。山梨大学附属小学校の研究紀要は翌年1950年の発行である。国語科の指導計画をみると、「光村」、「二葉」、「学書」、「日書」、「東書」の教科書会社および「文部省国語」の名前がある。

習と発展学習との三つが序をなして含まれていなければならない」としてそれぞれの留意事項が記されている。一つ目は読解作業についてである。それは機械的な音読や黙読を避けて、①すじ書きがわかるか、②この文には問題がいくつあるか、③一部あるいは全体の要約ができるか、④必要な箇所を摘出できるか、の4点を最も重要な要素として挙げている。話し合いの学習については「一日の長ある社会科にいい尽されている」としながらも、国語学習指導としては「ことばの立場からはっきりとした目標をもって進めていきたい」と、教科としての特徴を活かした話し合いの在り方に言及している。発展学習は理解したことをさらに深めることを目的として表現活動を取り入れている。それは、文字表現（作文、書写、劇化、報告文、手紙文など）、音声表現（独話、話し合い、音読など）、体表現（劇、見学、製作など）、その他（紙芝居、幻燈、絵など）が例示されている。評価については、山梨大学附属小学校の国語教育の目標に照らし、観察、成績物や帳面、テストをもとにして、理解、態度、技能の面から行うことが述べられている。

このように国語「学習指導計画」を概観してみると、現在につながる要素が散見されていることに気づく。特に、当時、新教育として単元を中心とした総合的な学習を目指していた教育思潮の中であって、今で言うところの、国語という教科としての見方・考え方に立脚した指導を行っていたことは注目すべき点である。

（５）おおざり教育研究紀要第9集「第六学年の教育計画」

6学年（高学年）の教育計画は「日常生活課程」「教科学習課程」「基礎学習課程」「選択学習課程」の4つの課程を基本としながらも、「教科の独自性をも生かす」という考えのもと教科を中心とした計画になっている。しかしそれは、「生活の場に立脚した教科学習」であることの断りが付されている。そのため、教科間で重複する事項はそれを避け、互いに関連させて、「各教科の持つ本質的なねらい」を十分に生かすことをねらった編成となっている。名称も1, 2学年は「系統学習課程」, 「生活学習課程」であったものが、3学年からは「教科学習課程」「日常生活課程」と変わっているのも、その表れであろう。

「基礎学習課程」は、生活学習の場において全ての基礎となる字の読み書き、計算などを反復練習によって向上させていくことをねらいとしている。これは、次のような記述にみられるように、当時の状況をも鑑みてのことと思われる。

現今、新教育に於て、この力が劣っているのを、学力が非常に落ちた如く言われているのを聞くが、学力が即ち基礎力とは言えぬまでも精神的にも、身体的にもこの期が、このようなものゝ練成の好期であり、必要な時である故、教育的必要観に立って（後略）。

「選択学習課程」は自主的学習態度や教科学習課程では充分練ることができないことなどを取り上げ、個性の芽生えを生かすことをねらいとして設定してある。また、「今までの単なる自由研究」と違って「初等普通教育を施すの教育である」と述べ、山梨大学附属小学校独自の観点からその意義を強調している。一方、児童はというと、「非常に興味を集中」し「日々の選択学習の時間を待ちこがれて」いるそうで、その学習の効果が上がっていることが記されている。

「教科学習課程」は、国語科を取り上げる。基本的には、解説も、年間指導計画一覧表の様式も前述した1学年と同じである。しかし、内容は、その多くの時間を生活単元学習と関連させてある低学年と比べて、教科としての独立性が強く感じられるものとなっている。例えば、「描写文の表現をよみとる」「文章中の擬人的手法をよみとる」「文の構想」「詩の主題」「順序」「比喩表現」「効果的に話すこと」など、現在につながる教科の言葉（学習用語）が多分に使われている。そして、学習指導要領（1947年版）国語科編（試案）だけでは分かりづらい、計画性や系統性、指導性そして具

体的な評価などが、小学校現場の実態に即してまとめられている。またそれは、現在で言う言語活動を多く取り入れた展開となっていて、新教育の在り方への山梨大学附属小学校としての一つの姿を提示するものとなっている。

Ⅳ 山梨県内の公立小学校のカリキュラム研究

この時期、山梨大学附属小学校の他に、山梨県内の小学校ではどのようにカリキュラムの研究及び実践を行っていたのだろうか。残存する資料からいくつかみていきたい。

1. 富士川小学校

「富士川プラン（試案一）生活カリキュラム」1949年（昭和24年）4月

現在、富士川小学校は統合して甲府市立善誘館小学校となっている。この研究紀要には、終戦後の混沌とした世情に産声をあげた新教育への憧憬と実現への強い意志を感じる。少し引用が長くなるが、その声を拾ってみたい。まず、富士川小のプランがどのような趣旨で企図されたのかが分かる部分を取り上げる。

- ・本プランは甲府市というコミュニティを基盤として、そこに発見される問題の解決を通して、有意義な社会的経験を積まして、いこうとするものであって、社会的経験を組織化したところの生活（経験）カリキュラムの立場に立って構成されているのである。
- ・従来の学習形態は、学習の主体であるべき児童を受動的立場において、教師が中心となって教科書を教えこんで、児童に暗記を求めていたのであるが、新しい学習形態は、この矛盾をすてて、真に児童が中心となって、全心身を動かしてあらゆる学習活動をつまみ、それを通して自ら知識を作り出すようにならなければならない。「座っていて聴いている。」という静的な、単調は、抽象的な学習活動から、「為すことによって学ぶ。」活気と、創意に満ちた豊かな学習活動へと、カリキュラム自体を改造していかなければならないのである。
- ・現実の生活の問題を次ぎ次ぎに解決して、社会の進展に貢献するところの実力をもった民主社会人を形成するためには、従来の断片的な教科教材の学習でなく、生活の問題を中心に、すべての学習を統合して、一つの統一ある生活としていかなければならない。

これらの声は、児童の生活や社会的経験をもとにした問題発見解決型の学習、児童中心主義の学習そして総合（統合）的な学習といった、新教育の思潮が貫かれている。また、現在の学習指導要領（2020年版）の改訂の折りに話題となったアクティブ・ラーニングや教科横断的な学習の必要性を説いた2016年の中教審答申と重なるように感じる面がある。

次に、教育方法については次のような説明があり、コア・カリキュラムを基盤とする生活統合カリキュラムを志向していくことが打ち出されている。

- ・本プランは児童のすべての学習を統合する中心（コア）に社会生活の問題解決の学習をおいて、これを中心課程（コア・カリキュラム）とし、その学習を中心学習とよんでおる。
- ・中心学習はカリキュラム全体の中核（コア）となる学習であり、知情意が一体となって、生活の中核を拡充発展させていく生活学習である。又、この中心学習は社会的な問題解決を中心とする学習であり、すべての学習を統合する中心である。
- ・このコアに直接、間接に関連する基礎的な経験（情操、技術、健康）を周辺に配して、周辺課程とし、その学習を周辺学習とよんでいる。

この中心学習は、第一コア（社会的な問題解決の学習）と第二コア（児童の生活指導）の2つで構成され、前者は学習の中核として据え、他の全ての学習を統合し、後者は児童の生活の問題を教育計画に組み入れ、両者を「有機的に組織立てよう」としている。

周辺学習は、中心学習の周辺にあって、これと直接、間接に関連しつつ中心学習を豊かに進展させていく基礎的・基本的学習であるとして、その内容は、音楽、図工、言語文学、数量形、体育、その他に分類されている。

学習範囲（スコープ）は、「社会中心の立場に立って、社会生活の機能（人間活動の基本的な範疇）」に基づいて、次の9つの学習課題として設定されている。

〈生命、消費、保全、保健、政治、交通運輸通信、教育、娯楽と芸術、交際〉

そして、全学年の上記9つの具体的な活動内容及びどの単元（生活経験単元）で、それらが重点的に学習されるかが単元名と共に一覧となって示されている。

富士川小学校ではコア・カリキュラムをどのように運用していったのだろうか。その具体が説明されている部分を以下に引用する。

- ・生活カリキュラムはそれ自身現実の生活として実践されなければならないことから、児童と教師との相互の話し合いによって立てなければならない。週のプログラムは金曜日に、一日のプログラムは前日に打ち合わせをして立てる。指導は、数人の教師の協力によって指導されなければならない。
- ・中心学習は「民主社会の建設にふさわしい実際的生活者」の育成をめざすものであるから学習は一貫した児童の生活でなければならない。
- ・学習指導の実際として、導入は問題の発見と把握の段階としている。運動、視覚、聴覚を通して興味を刺激する環境を構成する。児童の欲求を満足させる遊びや作業を行わせる。児童の生活と社会生活との矛盾を発見させる。経験を整理することによって新しい欲求を刺激する。児童の生活領域内に生起する偶発的に事象を捉える
- ・学習活動は、何を教えるかでなく、何を経験させるかであり、どんな生活をさせるかである。
- ・調査を中心とする学習、作業を中心とする学習、話し合いを中心とする学習、表現を中心とする学習。
- ・学習の組織として、分団（グループ）学習（低学年は一对一の二人、高学年は六人程度が適当）、個別学習、学級全体学習。
- ・効果判定一は、指導したことの効果あるいは学習したことの効果の測定であって、これによって次の指導や学習を一層効果的にするにはどうしたらよいかの資料を得ることではない。
- ・単に知的発達だけでなく、社会的、情操的、身体的発達なども科学的に判定しなければならない。
- ・従来の教育測定やテストだけでなく、観察や面接や事例研究を利用しなければならない。
- ・試験や考査は学期末や学年末に行われたが、効果判定は常に必要な教育活動であり、指導や学習活動に一部である。これによって教師児童共に次の指導や学習が方向づけられるものである。
- ・今後に残された問題として、現在の記録のように他の児童の比較によって優劣を決めたり段階をつけたり、まして一定の規準に照らして成功か失敗かを判断して優劣をつけるなどは何等の意味を持っていない。それは個々の児童の跡を明らかにし得る表現でなければならない。

即ち診断的な評価でなければならない。指導の方法についても、個々の児童の発達に応じた指導や学習が行われなければならない。

上記には、単元計画の立て方や学習場面における導入、学習の内容や形態、さらには評価について、当時の富士川小学校が目指した教育の在り方が述べられている。その一つ一つが今日につながるものであり、旧さは全くと言っていいほど感じられない。特に評価の考え方は、当時導入されたばかりの学籍簿による相対評価¹⁴への批判とも捉えられる。相対的評価はやがて能力主義の時代を経て平成の時代に見直されるまでの長い間、評価方法のスタンダードとなり、その間受験戦争を助長するものとして批判の的ともなった。そのような意味で富士川小のカリキュラム研究は先見の明があったと言えそうである。しかし、一方で「われわれが、生活カリキュラム研究を志向して、現在まで、最も苦心惨憺したのは、実に、この中心学習（コア・カリキュラム）の構成と展開とであった。」と述べるように、新教育の理念を現実に即して具体化することの難しさを、他校と同様に感じていたことも分かる。

2. 鏡中條小学校

「本校の教育計画 第二集 全体教育課程」1950年（昭和25）年度

鏡中條小学校は、昭和46年に、三恵小学校、藤田小学校と共に現在の南アルプス市立若草小学校に統合された学校である。この研究紀要は山梨県の実験学校の指定を受けて刊行されたようであるが、それ以前から社会科を中心とした研究を計画的に行ってきたことが序に記されている。教育全体計画として、「日常生活課程」、「基礎教養課程」、「学校図書館サービスセンター」の3つが掲げられている。「日常生活課程」は最も重要な位置をもつものとして教育課程の中核をなしている。その性格として「(1) 協力奉仕自治の精神を根底とせる学校社会の建設の課程 (2) 良き社会人郷土人としての習慣形成の課程 (3) クラブ的自由研究活動の場及び教科の総合的学習の場としての課程」の3点が与えられている。

「基礎教養課程」では、生活学習の基礎教科として各教科が位置づけられている。それは「(1) 問題解決による経験の拡充とし社会科を (2) 知識技能の修練としての国、算、理、音、図、家を (3) 体力増進としての、保健体育、レクリエーションの課程を」と3つに分類されている。これらは「日常生活課程」と相互に連絡をはかりながら運営することとしている。ただし、学年が低くなる（3学年以下）につれてほとんど総合的学習形態（日常生活単元が社会科単元であり各教科単元）となり、学年が進むにつれて分科的要素をもつようにしてある。各教科の系統的学習といえども、生活力育成の基礎学習であるため生活学習の実践の場として…と「日常生活課程」を補完するものとしての位置づけが繰り返さされている。

本研究紀要発行の1950年（昭和25）年度以前から、鏡中條小学校では、新教育の精神と方法を充分生かすために、社会科を生活経験教育の中心課程に据え研究を行ってきた。しかし、「これに対し常にきびしい反省と修正の鞭を加えることにやぶさかではなかった」と述べるように、課題意識をもって研究に取り組んできたようである。その課題とは何か。一つは社会科の教科としての性格についてである。「ぼっか的なカリキュラム」あるいは「遊戯的感覚的なあまいカリキュラム」と中央の教育理論の専門家の内に加えられた強い反省の言葉を引用してさらに、「社会科に生活学習の全領域をいかに教育の全領域をもたせたかの如き性格をもたせつゝその取扱いに於ては、平面的な感覚的

¹⁴ 1948年（昭和23年）の学籍簿（昭和24年から指導要録と改名）では、正規分布による相対評価が導入された（比率を5は7%, 4は24%, 3は38%, 2は24%, 1は7%）。この時期に導入された相対評価（集団に準拠する評価）は、1961年（昭和36年）の指導要録改訂において、各教科別の評定として定位した。

な何か知らんするどいセンス或いはきびしさの欠けたぼっか的なものに落入り（中略）学問性という点に欠けていたのではないかと」と述べ、問題を提起している。いま一つは鏡中條小学校の伝統的雰囲気をもどのように新教育として意味づけするのかという課題である。研究紀要では、「かつて大鍛と云い、武道といふ、精神的訓練といふ国家主義的全体の主義教育の中核として大日本鏡中條として名をなした本校の教育環境であります。勿論これ等は終戦と同時に外面形式的な面はそれこそ跡形もなく取りのぞかれ教育的観点もまったく率先進歩的位置をもつにいたっておりますが而し長い伝統のもたらす雰囲気はまったく端的に之を払拭することは困難であります。寧ろ出来得ないものであります。而し私達はこの雰囲気を決して悪いものばかりであるとは思いません。寧ろ良い点の方が多いのではないかとさへ思っています。」と述べ、特に自発性の問題、民主的な問題、雅量の問題、精神的な習慣形成の面など、日常生活学習による実践によって生まれ出るものだけに、大きな悩みをもったことを吐露している。

3. 鰍澤小学校

「鰍澤小学校プラン＝生活カリキュラム＝第二集（中心学習実践記録）」1950年（昭和25）年度

富士川町に同名（鰍沢小学校）で現存する学校である。昭和24年度に山梨県のモデルスクールに指定され「カリキュラム改善とガイダンス」をテーマに研究をおこなった2年目であることが記されている。社会科を中心とした単元学習で表題の通り実践記録が主に取り上げられており、教育課程の全体的な構想は分からない。実践記録には、学年別に1年間にわたる単元ごとの単元名、期間、学習計画、参考図書、要素などが記述されている。単元名の一例を次に挙げる。「電車ごっこをしよう」（1学年、35時間）、「2年生の用意をしよう」（2学年、74時間）、「体を丈夫にする工夫をしよう」（3学年、47時間）、「私達の家を作ろう」（4学年、43時間）。このように、一つの単元が数十時間、長いものになると70時間を超える単元もあり、それが教育課程の中心であることが推察される。

4. 富里小学校

「社会科指導実践記録 附改訂社会科カリキュラム」1951年（昭和26年）12月8日

旧下部町にあった学校で現在は身延町立下山小学校へ統合。昭和26年度の山梨県の実験学校として指定され社会科の学習指導法の改善を研究テーマに取り組んだ実践記録が綴られている。鰍澤小学校と同様に社会科を中心とした単元学習の実践記録が主に取り上げられている。教師の指導や児童の活動などが日記風に詳しく記録されているのが特徴である。教師と児童の会話などのやりとりも記述しており、学習の様子や学級の雰囲気が伝わってくる。

5. 上野原小学校

「社会科カリキュラム1951」1951年（昭和26年）2月10日

上野原市に同名で現存する学校である。実験学校ではなく、自主的な研究としてその成果をまとめたものであることが序に触れている。前年度の社会科中心の教育課程を基盤としながらも、その反省として「他教科の線をもっと強く出す」必要性から次のような性格を研究の基本に据えている。

- ・コアカリキュラムを理想とした教科カリキュラムである
- ・社会科が中心になっても、他の国語、算数、理科等が中心になってもよい
- ・他教科のカリキュラムは教科書を規準とするが、社会科を含んだ全ての教科は融合しなくてはならない
- ・他教科を周辺の教材として考えず、資料としてかかげた

各学年の実践記録には、単元の学習活動の他、国語、算数、理科などの教科が独立した項目としてあり、それぞれにその単元での関わりが記されている。これは上記の反省が反映されたものと考えられる。しかし教科の欄はメモ程度の簡略な内容であるため、研究や実践がまだ途上にあることを感じる。ただ、特に教科への志向が垣間見られる点は、上野原小学校において、この時期の研究及び実践の特徴として挙げられるだろう。

V まとめ

ここまで「戦後前期」と区分した1951年（昭和26年）までの残存する資料（研究紀要）から山梨県内におけるいくつかの小学校のカリキュラム開発に関わる取組（カリキュラムの研究と実践）について考察してきた。そこから得られた知見を次に挙げまとめとする。

学習指導要領試案（1947年版）の出された翌年、1948年度（昭和23年度）に入るとカリキュラム改造の波が全国各地の附属小学校を中心に起こり始めたとされる（酒井2016）。1950年（昭和25年）当時において、金子（「教育課程」1950, p. 184）は、全国の学校で取り組むカリキュラムを次のように大きく3類型に分類し、その下位に「従来のカリキュラム」を配置してその関係性を示している。

（一）教科中心カリキュラム

教科カリキュラム、相関カリキュラム、融合カリキュラム、広域カリキュラム（教科型）

（二）経験中心カリキュラム

広域カリキュラム（経験型）、コア・カリキュラム、生成カリキュラム

（三）コア・カリキュラム

このような類別の多さから、学習指導要領にも述べられているように、全国各地の学校がまさに「創意を生かし、くふうを重ね」それぞれの学校にあったカリキュラムを模索しながら作成していたことがうかがえる。新教育の思潮からその多くは上記（一）、（二）に該当する。山梨大学附属小学校をはじめ県内各校もその全国的な動きに呼応して、各校独自のカリキュラムを作成していったとみられる。

しかし、1951年（昭和26年）の学習指導要領の改訂を前にした時期に、早くもこのような児童の生活経験を基軸とした生活単元学習を中心に教科は周辺に置くといったこの新教育はその理想と現実の乖離から全国的に陰りを見せ始める¹⁵。本稿で取り上げた県内各校の研究紀要においても課題や問題を指摘した部分が散見される。一方で、その理念や理想を教育改革の理論として一旦は受け入れ、各校の実態に合うよう懸命な研究と実践を積み重ねていたことがうかがえ、またその側面の方が強く本筋であることは間違いない。

そういった中で、山梨大学附属小学校のカリキュラム設計は複数の形式を採用していた。低学年においては生活経験単元を主とした学習を、高学年においては教科のそれへと徐々に傾斜させている点である。そこには教科の専門性が強い国立大学の附属学校としての特性も表れていると考えられる。しかし、その教科の学習は、高学年であっても生活経験単元に内包されたコア領域との関連が前提となる経験領域として位置付けられている。つまり教科と経験との統合を志向したもので、

¹⁵ 学習指導要領（1947年版）作成の資料となったカリフォルニア・プラン（作業単位）とヴァージニア・プランは、カリキュラム構成や開発の意図、単元の構成原理において全く異なるプランであった。そこに社会科編の「問題」には上田ら日本側の理念も反映された。このような混沌とした状況は、教育現場における実践上の困難性と混乱をもたらした一因とされる。（坂口2009, pp. 79-80）

今日のような教科として確立し系統だったカリキュラムとはなっていない。しかし、研究紀要にも随所に課題が述べられていることから、経験中心と教科中心のカリキュラムの狭間で葛藤を抱えていることが見受けられる。やがて数年の後には教科書を中心とした学習、能力主義への転換を全国的に迎えることとなるが、その萌芽がこの研究紀要にはみられる。

他方、公立学校の5校は、多くが県指定の実験学校という性質上、生活経験単元を基軸にしたコア・カリキュラムが主であった。しかしその詳細は、各学校によって違う。そこには各校の置かれた地域の特性や学校規模、教員構成、教育環境、そして戦前からの伝統など、その学校の実態や実情があり、それに合わせたカリキュラム開発（作成）を試みていたことが分かる。それを大まかにまとめてみると、富士川小学校は全ての学習を統合したコア（中心課程）に領域（情操、技術、健康など）を加味したカリキュラム・プラン、鏡中条小学校は日常生活を基軸としたコア（中心課程）に教科目（社会科他）カリキュラム・プラン、鰐澤小学校と富里小学校は社会科を基軸にしたコア（中心課程）カリキュラム・プラン、上野原小学校は社会科を基軸にしたコア（中心課程）に教科目（国語他）をより強調したカリキュラム・プランとなる。

また、鏡中条小学校のように、戦前の旧教育の良さ（評価すべき面）と新教育に向けた改革志向との狭間で苦悩する学校の姿もある。現在でも矢継ぎ早の教育改革に疲弊しがちな学校現場において、その大転換を迫られた当時の現場教師の労苦は戦後民主的な新教育構築に挑む高揚感を差し引いても察するに余りある。

国語教育の面においては、その教科としての独自性がその内容や学習の展開において明確に示されているのは山梨大学附属小学校である。その考察は上述した通りである。国語は、特に低学年では生活経験に基盤を置く単元学習に融合された形で展開されていく（高学年では教科的な要素が漸増していく）ことから、1950年（昭和25年）の時点では、独立した教科としての体系及び系統は未発達ではあるが、やがてのそれに向けた兆しを確かに感じられる提案となっている。

VI おわりに

本稿で取り上げた山梨県内小学校の研究紀要はすべて各校が独自に制作編集し公開研究会などで非売品として配付したものである。カリキュラム開発は本稿に掲載した小学校以外にも多くの学校で行われ、資料（研究紀要等）も発行されたのではないかと推察するが、その管理は各校に任せられ、時を経る中で多くが消失してしまったと思われる。現在、山梨県内の各校の研究紀要は山梨県総合教育センターが一括管理し、本稿の資料も多くはそこから借用した。ここにあらためて謝意を表したい。筆者は、保管庫の資料を一つ一つ調べたが、山梨県内各校の研究紀要は昭和30年代に入ってから徐々に見られるようになり、昭和20年代のものは稀少で、その前半となるとほぼ本稿で取り上げたものに限られる（これは、当時まだ各校における研究体制や印刷等の環境が十分ではなかったことも考えられる）。今後の研究のためにも、各校における管理体制が望まれる。また、資料のデジタル化、アーカイブ化も望まれるところである。

以上、少ない資料からの考察であり、本稿をもって戦後前期の山梨県内小学校のカリキュラム開発の全容をあらわすものではない。また、特定の年度の研究紀要であるため、特にその後の変遷は分からない。前述したように資料が散逸している中で難しい面もあるが、各校の倉庫等や個人宅に現存する可能性に期待し、同一校のその後の数年にわたるカリキュラム開発の様相を概観し、戦後新教育から能力主義教育へどのように移行していったのか引き続き考察を試みたい。国語科における追究は十分に成し得なかった。今後の研究課題として取り組んでいきたい。

Ⅶ 資料

【引用文献】

飛田多喜雄（1988a）「国語教育方法論史」明治図書 pp. 231-232

飛田多喜雄（1988b）「続・国語教育方法論史」明治図書

坂口京子（2009）「戦後新教育における経験主義国語教育の研究―経験主義教育観の摂取と実践的理論の過程―」風間書房

馬場四郎（1949）「コア・カリキュラムの運営」誠文堂新光社

西岡加名恵，石井英真，田中耕治（2015）「新しい教育評価入門―人を育てる評価のために」有斐閣 p. 247

木田宏教育資料集 1 昭和 20 年代初期 岐阜大学教育学部附属カリキュラム開発研究センター平成 8 年 5 月

山田栄，金子孫市，廣岡亮藏，倉澤剛，杉浦正一（1950）「教育課程 教育大学講座 14」金子書房
「新教育ハンドブック 新教育と学力低下」原書房 1949 年（昭和 24 年）12 月 20 日発行

※青木誠四郎「第一章 学力の新しい考え方」，國分一太郎「第二章 よみ・かき・計算能力の低下」，倉沢栄吉「第四章国語学力を救うもの」，宮下美弘「第八章 生活学習と基礎的技能の指導」を主に参照した。

水原克敏（2015）「戦後改革期における文部省実験校の研究成果―東京高等師範学校附属小学校の 3 種のカリキュラム開発―」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』第 25 号

中西修一郎（2017）「戦後初期における北条小学校のカリキュラム開発に関する一考察―単元学習の展開に着目して―」『京都大学大学院教育学研究科紀要』63:257-269

河野智文（2018）「戦後初期におけるカリキュラム構成の視点と方法―『カリキュラム構成の手引き』（神奈川懸教育研究所，1951 年）を手がかりとして―」『福岡教育大学紀要』第 67 号，第 1 分冊，13-26

酒井宏明（2016）「愛知学芸大学附属春日井小学校のコア・カリキュラムの実践―春日井プランの成立と展開を中心として―」『東海学院大学短期大学部紀要』42

文部省「学習指導要領 一般編（試案）昭和二十二年度」，「昭和二十二年度（試案）学習指導要領 国語科編」，「学習指導要領 一般編（試案）昭和 26 年（1951）改訂版」

山梨大学山梨師範学校附属小学校「おおぎり教育研究紀要第 3 集～9 集」1950 年（昭和 25 年）7 月 1 日発行

富士川小学校「富士川プラン（試案一）生活カリキュラム」1949 年（昭和 24 年）4 月

鏡中條小学校「本校の教育計画 第二集 全体教育課程」1950 年（昭和 25）年度

鯉澤小学校「鯉澤小学校プラン＝生活カリキュラム＝第二集（中心学習実践記録）」1950 年（昭和 25）年度

富里小学校「社会科指導実践記録 附改訂社会科カリキュラム」1951 年（昭和 26 年）12 月 8 日

上野原小学校「社会科カリキュラム 1951」1951 年（昭和 26 年）2 月 10 日

甲府市立北中学校，「甲府北中プラン 生活カリキュラム第三集」昭和二十四年十月，「甲府北中プラン生活カリキュラム第四集」1950. 1. 2

「あゆみ」山梨大学学芸学部附属小学校編 1960 年 6 月 非売品

広島大学図書館教科書コレクション画像データベース <http://dc.lib.hiroshima-u.ac.jp/text/>（閲覧日：2020. 9. 11）

文部科学省「学習指導要領の改訂の経過」https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/idea/_icsFiles/afieldfile/2011/03/30/1304372_001.pdf（閲覧日：2020. 9. 14）

※本稿では，引用文は原則として，旧字体の漢字は新字体とし，仮名遣いや送り仮名は原文のままとした。